

# 荀子非十二子篇を讀む

諸 橋 轍 次

(一)

荀子の諸篇中、非十二子は特に色々の問題を提起し得る面白い文だと思ふ。先秦の諸子が各々独自の立場に於て花々しく論難攻撃を試みて居つたことは誠に世界の哲學史上罕に見る一大偉觀であつて、此の十二子篇を讀むと明らかに此等諸子の立場も見えるし、活躍せる人物も分り、且又其の長處短處も知れて來るのである。斯く考へると此の一篇は先秦諸子の活劇の一縮圖である様にも考へられる。且又此等諸子に對する批評を通じて荀子自身の立場も伺はれ隨て荀子自身が何派の人で且どの系統の人であるかと云ふことも明瞭になつて來る。其の點から云へば此の一篇はまた儒學史の一項にも加へて差支へない様に思はれる。凡ての此等のことを考へながら、此から二三論を進めよう。

先づ第一に非十二子篇に現はれた人物の話を試みるとす。試みに他の書物の中から非十二子篇に出て居る人々を拾ひ出して見んとするが、此等の人々は五經の中には、無論一人も出て居る筈もない。四書の中には、論語、孟子、中庸それらに極僅か出てゐる。其以外は全體先秦時代の諸子類にのみ出て居るのである。今私の調べた是等の書物は儒家類では、孔子家語、孔叢子、荀子、新語、中經、新書、鹽鐵論、新序、說苑、方言、法言、潛夫論、申鑒、中論、文中子、法家類では管子、晏子、申子、商子、鄧析子、尸子、韓非子、雜家類では鬻子、慎子、尹文子、公孫龍子、鬼谷子、呂氏春秋、淮南子、論衡、白虎通、道家類では老子、莊子、列子が大半で其他も少しある、大畧そんな中か

ら調べたのである。此等の書物に非十二子に表れてゐる人物が全部出て来る譯ではない。出て来ないのは今挙げた書物の中に十二子が出て居らぬと云ふ譯である。大概間違ひなく調べた積であるが、一二の粗漏はあるかも知れぬ。以下個人々に就て話す。

非十二子篇に出て来る一番初の人は它囂と魏牟とである。そして荀子は此の二人を同一視して一緒に論じて居る。

所で此の它囂と云ふ人だけほどの書物にも、今挙げたあらゆる書物にも、一つも出て来ない。で此文だけは全然分らないのである。昔から荀子の解釋を見ても諸子類同様、皆目何代の人であるかさへ分らない。稍これに似て居るのは、世本の中に出て来る楚の平王の孫の、田公它成と云ふ人である。そこで此の田公它成と云ふ人が或はこの它囂に當りはしないかと云ふことを清の王先謙が言つて居るが、それもどうであらうか。韓詩外傳は大體此の非十二子の文を其儘取つて居るが、其の中では它囂といふ事を言はずに其の代りに范睢蔡澤の范睢を加へて居る。斯んな始末である故此の人物に就ては全然分らぬといふ方が無難かと思ふ。

次は魏牟。此の魏牟の事は先づ列子の（中）仲尼篇（下）の中に出て居る。それに依ると魏牟と云ふ人は、魏の國の賢公子であつた。そして普通、公子牟といふ名前傳はつて居る。嘗つて公孫龍の門下になつた。當時樂正子與といふ人が居つて、此の公子牟を嘲弄せり。お前は何の故に公孫龍などを師と仰いで居るのか、彼は偽の人間ではないか。前には孔子の子孫孔穿といふ人を欺いて居る。後には魏の王様を欺いて居る。其の主張する白馬馬に非ずといふ説の如きは全然意味のない詭辯ではないか、その人物をお前は先生として居るとはどういふ譯であるかと斯う言つてひやかしたのである。するとそれに對して魏牟が幾度も辯解をして最後に、辯解に困つて了つて、仕方がないので、請ふ餘日を待たむ、と言つたと云ふ話がある。是が列子の話。それから今一つは莊子の（中）秋水篇（上）に出て居るのである。其によると魏牟と公孫龍との師弟關係があべこべになつて居る。即ち列子の方では魏牟が公孫龍の門人になつて居るが、今度莊子の秋水篇では公孫龍が魏牟に色々質問して居る事になつてゐる。先づ公孫龍が言ふ「自分は若い時分からあなたに就て色々學問をやつて來ましたが、さて今日新しく莊子について學んで見ると、莊子の教といふものが、

何を言つて居るものやら自分にはさつぱり分らない、どうしたものであらうか」と。所が魏牟は答へた。「それはお前がまだ學問が進んで居らぬからである。お前は丁度井戸の中に棲んで居る蛙の様なものだ、埒井の鼈がある時東海の大きな鼈に向つて話をした。井戸の中には非常な楽しみがあるが、少しお出でになつては如何ですか。とそこで其の大きな鼈が井戸の中に行くと、片足がまだ這入りきらぬ中にもう井戸の底に足がつかへて了つた」。と斯んなお話で丁度そのやうなもので、お前には、莊子を批評する資格がないのだと言ふのである。此の文章を讀んで見ると魏牟といふ人は必ずや莊子の一派の人であらうといふ事が畧々想像がつく。それから淮南子の「道應訓」の中にも、魏牟の話が出て居る。それによると、此の魏牟が詹子といふ人間に向つて、色々養生の道を問ふて居る。自分は身體は江海の上に居るが心はいつも魏闕に行つて居る。つまり田舎に住んでは居るけれども都に野心を斷つことが出来ぬ。此の心を如何様にして爲むべきであらうかと質問したのである。其れに對して詹子は「それは生を重んずるより外仕方がない。生を重んずれば、即ち利を輕んずる事になる。それが即ち養生の道である」といつて、そこに老子の道をして教へて居るのである。此の話から我々が考へて見るに此の魏牟といふ人物は葆身養生の道を講ずる老莊道家に關係を持つた人であるといふ事が推察出来るのである。つまり魏牟といふ人は大體先秦道家の流れの人であらうといふ事が分るのである。今此の非十二子篇の它囂魏牟に關する批評を見ると、情性を縦にし、恣睢に安んじ、禽獸の行をやつて居る。それで文に合し、治に通ずる事が出来ないと云つて居る。是を後の漢書藝文志道家の批評に(5)放者之を爲すに及んでは則ち禮樂を絶去し、仁義を兼棄てんと欲す。といふものに對比致して居るが正に符節を合するが如きを覺ゆるのである。斯くて非十二子篇の它囂魏牟の批評は當年の道家の一派に對する荀子の批評であるといふ事が推察せられるのである。

(1) 中山公子牟者魏國之賢公子也、好與賢人遊、不恤國事、而悅趙人公孫龍、樂正子輿之徒笑之……樂正子輿曰、……白馬非馬、孤犢未嘗有母、其負類反類反倫、不可勝言也、公子牟曰、子不諱至言、而以爲尤也、尤其在子矣 (列子 仲尼)

(2) 公孫龍問ニ於魏牟一曰、龍少學ニ先生之道、今吾聞ニ莊子之言、汙焉異之、……

公子牟隱レ机太息、仰レ天而笑曰、子獨不聞ニ夫陷井之鼃乎、謂ニ東海之鼃一曰、……且子獨不聞ニ壽陵餘子之學ニ行於邯鄲一與……

公孫龍口呿而不合、舌舉而不下、乃逸而走 (莊子 秋水)

(3) 中山公子牟、謂ニ詹子一曰、身處ニ江湖之上、心在ニ魏闕之下、爲レ之奈何、詹子曰、重レ生、重レ生則輕レ利、……故老

子曰、知レ和曰常、知レ常曰明…… (淮南 道應)

(4) 縱ニ情性、安ニ恣睢、禽獸之行、不レ足以合レ文通レ治、然而其持レ之有レ故、其言レ之成レ理、足ニ以欺ニ惑愚衆、是它囂魏牟也 (荀子非十二子)

(5) 當ニ放者爲レ之、則欲ニ絶ニ去禮樂、兼樂ニ仁義、曰獨任ニ清虛、可ニ以爲レ治。 (漢書藝文志)

(二)

非十二子篇に出て居る第二次の人々は陳仲と史鱸との二人である。此の中陳仲に就ては、先づ荀子の「不苟篇」の中に論じて居る。それに依ると今日世を害する人間の中で、名前を盗む者が最も害をなす。名を盗むは貨を盗むに如かず、名を盗む方が一層悪いといふ議論から最後に田仲史鱸不<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>盜也。といふ批評をして居るが、文中の田仲は無論、陳仲である。昔は韻が同じなればその儘通じて用ひる事がある、此の文で見ると陳仲は要するに名前を盗む人間といふ事になつて居る。又此の人のことは孟子の「滕文公」の下に出て居る。當時、匡章といふ人が孟子に質問をなせり。陳仲子といふ人は非常な廉潔な人間である。彼は於陵といふ所に隠居して居つて、三日間は物を食べない。それは不義なものを食べないといふ主張からであつた。それが爲に一時は耳も聞えなくなり、目も見えなくなつた。漸く半分ばかり虫の食つてる杏を見つけてそれを食べてから耳も聞え、目も見えるやうになつたといふ。その話の後に陳仲子の此の物をも食べずに居つたかといふ理由を説明して居るが、つまり自分の兄上のやり方が不義であるから兄の食物を食べるのは不義の碌を食むに均しい。母上のやり方が不義であるから、其の室に居るは不義の室に居ると均

しいから居らない。其の點が非常な籬潔な人間だと匡章が褒めたので、それに對して孟子が批評して、若しそれを籬潔とするならば、世の中に蚘ほど籬潔なものはない。陳仲子は蚘の眞似をしたらよからう。そして土の中に潜つて居つたらよからうと、斯う批評を下して居るのである。だから孟子に表れて居る陳仲子は果して善い人間か、悪い人間かは分らないのである。唯如何にも片意地の人間の様に見えて居る。それと畧々同じ様な話は論衡の刺孟篇(3)の中にも出て居つて、最後に論衡の筆者、漢の王充は、孟子の陳仲子評を更に批評して孟子の論は當らない。矢張陳仲子は籬潔な人間として認めて行く可きものであると言つて居る。要するに陳仲子に關する褒罪毀譽は一定せざるもの様である。論衡商蟲篇(4)の中には今一つ螻虫といふ虫の事に就ての農家の説が入つて居るが、此は陳仲子が虫のついた李を食つたといふ所から、其に因んで書いたものらしいのであるが、格別陳仲子の人物に就ては何等の材料をも提出しないのである。中論の貴言篇(5)に出て居る話によると矢張陳仲子はつまらぬ人間だと言ふことに批評せられて居る。其は例の尾生といふ人間と肩を並べて居る。尾生は女と約束して橋の下で相會ふ事になつて居つたが、女が來なかつたので待つて居ると、其の中に水がだんだん増して來て、とうとう尾生は溺れて死んで了ひ世に所謂尾生の信といふ諺を残したのであるが、陳仲子が其と同類だと云はれてゐる。更に陳仲子は論語の中にも出て居る直躬に比較せられて居るのである。直躬のことは論語の子路篇に出て居るが、此の人の話は次の様である。或時葉公が孔子に語つて云ふには自分の治めて居る黨の中に非常に正直者がゐる。親が羊を攘んだところ、其の子が之れを證明したといつたのである。ところが孔子は之を批評して、吾黨の直きものは其とは違ふ。父は子の爲に隱し、子は父の爲に隱す、其の中に眞の正直があると云はれたのである。今貴言篇では其の正直者の愚さを批評して彼の陳仲子が兄の食を不義として食はずに飢えて死んだといふが如きは實に此の頭をつまらぬ人間であるといふやうに申してある。要するに陳仲子については以上の様なことだけが話に残つて居るのであつて、其以外はどうか云ふ人物であるのか少しも分らない。恐らくは學説を以て立つたほどの人間ではなかつたであらう。そして強いて云ふならば少し無理をして、名を盗んで居つた人間ではなかつたらうかと云ふことが想像されるのである。

次は史鱮であるが、此の人に就ては非常に材料が多く、しかもどの材料を見ても悪い人間といふ材料は一つもない。論語の衛靈公篇(6)の中では孔子が史鱮を批評致して、直哉史魚。邦有道如矢。邦無道如矢と云ひその次に蘧伯玉を論じて、君子哉蘧伯玉。邦有道則仕。邦無道則可卷而懷之。と云つて居る。此は或は史魚を褒めたのではなく、却つて訕つたのかも知れぬ。それは解釋によつて違つて居る様であるが、孔子の他の場合の言葉から考へると有道の國家に於て矢の如く眞直に進んでゆくと同時に無道の國家に於ても矢の如く眞直に進んでゆくといふ遣り方は幾らか満足されなかつたであらうかと思はれる。それに對して蘧伯玉は、行藏進退をうまく考へて、有道の國家には出ても、無道の國家には出ないと云ふのであるから、此の蘧伯玉の方は君子として褒められたのである。併し此の二人で云へば幾分褒貶の寓意はあると見られるが、併し此とても決して惡口にはならない。眞直な正直な人間であるといふ點に於ては差支へないのである。之が他の書物にはどう出て居るか云へば、先づ孔子家語の賢君篇(7)の中に出て居る。それによると、林國、慶足と相對して史鱮も衛の國の賢臣といふ事にして居るのである。而して衛の靈公が之を甚だ優遇して居つたといふ話がある。それから同じく孔子家語の六本篇(8)によると、孔子の言葉と言つて顔回と相並べて居る。孔子が云ふには、顔回は君子の道が四つある。史鱮には男子の道が三つある。かう言ひて、顔回と相並べ褒めて居る。すぐその次に、曾子が、史鱮を批評した言葉が出て居る。それによると、色々批評を致し、結局顔回と史鱮と二人並べて、自分は到底此の二人には及ばないといふ言葉を以て結んで居る。しかし孔子から見て顔回と並べ、曾子から見て到底及ばぬといふ事を言はれる程の人物になつて居る譯である。所がそこに於ては何等具體的な事柄は分つて居らないのであるが、同じ孔子家語の(9)五帝德篇になると、それには、此の史鱮が今や病氣になつて死なうとした場合に言つた言葉が出て居る。衛の國には蘧伯玉といふ、あゝいふ君子が居つても、自分は終に之を衛公に勧めて用ひしむる事は出来なかつた、それから彌子瑕といふ小人が居るけれども、自分は之を靈公に勧めて退けしむる事は出来なかつた。之はつまり自分が朝廷に於て、君を正す事の責任を全くしなかつたのであるから、生きて君を正すことの出来なかつた自分としては、死んで禮を爲すといふことは相濟まぬ、自分が死んだなら

ばどうか自分の死骸を牖の下においてくれ、床においてくれといふ、かういふ遺言をして死んだ、愈々史鱈が死んで了つたので、子供は、遺言通りにしておいた、所がそこに衛の靈公がお悔みに來られた、そしてその様子が變なので様子を聞いて見ると其の子供は逐一父の臨終の事情を述べて、實は自分の父親は生きて朝廷に於て君を正す責任を盡す事が出来なかつたから、死んで禮をなしては相濟まぬ、自分が死んだら死骸は牖の下に置いてくれといふ遺言で御座いましたから、その遺言通りに致した次第でありますといふ話をした。所が靈公も非常に後悔をして、それは大變な事をした。お前のお父さんは實に忠義な人間である。死して諫む。之を死諫といふ。死諫をしてくれる人は未だ嘗てないから、自分は早速蘧伯玉を用ひて、彌子瑕を退ける事にしやうと曰はれたとの事である。此の話は史鱈の忠義なる所以を表したものである。それと同じ話が新序雜事篇(10)にも載つて居る。要するに此等から見ても非常に人君に對しては忠義の人であつたといふ事だけは分つて居るわけである。尙それ以外に就いても例へば說苑の尊賢篇(11)には、史鱈が衛の國を去つたといふので、衛の靈公が非常に後悔をしたといふ話が出て居る。嘗て趙簡子といふ苑の奉使篇(12)の中に於ても、矢張政治家としての史鱈が相當の人物だといふ話が出て居る。嘗て趙簡子といふ人が、衛の國を伐たうと思つて出掛けたことがある。出掛けて行つた所が衛の國に史鱈といふ賢臣が居るといふ事實を知り、あの男が居る間は衛の國を伐つことは出来ぬといつたといふことが書いてある。政治家として、相當な人物であつたことが分る。それから說苑の政理篇(13)の中には衛の靈公が政治を問うた時に、此の史鱈が政治をやるなら、先づ第一に大理を務と爲して裁判の公平を期するといふ事が最も大切であるといふ話をしたといふ様な話がある。先づ大體此の人は政治に若干の關係のあつた人といふ事が、我々には問題になるのであつた。それから莊子の方には大分澤山出てくる。先づ駢拇篇(14)には、孔子の門人の曾子と相並べて居る。それから在宥篇(15)胙篋篇(16)に於ても曾子と相並べて居る。結局どういふ事を言つて居るかといふと、曾子並びに史鱈といふ様な人々は、自分の……人間の性を矯めて、正しき行をする爲に努力して居る。之に對して泥棒である所の盜跖は、人間の性を矯めて、悪い事をしやうと努力して居る。此の二つの系統のやり方は違ふけれども、性を矯めるといふ事に就い

ては、同一の人間で共に取るに足りない、かういふ莊子一流の悪口を言つて居るのである。も一つ莊子の天地篇(17)の中にも矢張同じ議論が出て居る。その一番終に、美惡異なれども、其の性を失ふに於ては一なり、善と惡との間に差別はあるけれども、其の性を失ふに於ては一であるといふ批評を下して居る。つまり曾子史鱮の行は老莊の方から見ますと、無理をなして、善をしようと見たのだらうと思ふ。これまでのことを考へて見ても、陳仲史鱮といふものが、どういふ系統の人間であるかはまだ分らない。非十二子篇では此の二人を論じて、忍情性、寡裕利歧、苟以三分異人爲高。と云つて批評してゐる。つまり無理に性情を矯めて居る所が此の人達の悪い所である。それによつて大衆を合することも出来ず、大分を明らかにする事も出来ないではないかと言つて居るのである。併し只其文であつて、之を荀子の時代の學風に當て、見ると、これに當るものは一つも見當らない。強ひて言へば、雜家の中にある人々が之に當れ或は當る人間だと思ふのである。韓詩外傳では此の二人を省いて居る。二人に代ふるに田文莊周を擧げて居る。してみると荀子が此の二人を攻撃して居るのは、學問上の議論から攻撃して居るのではなくて、只此等の人々が餘りに性情を矯めて居るといふ其の點で攻撃して居るのであるかも知れん。恐らくは此は學派の攻撃と見ることの出来ないものであらう。

(1) 夫富貴者、則類傲之、夫貧賤者、則求柔之、是非仁人之情也、是姦人將以盜名於曉世者也、險莫大焉、故曰、盜名不如盜貨、田仲史鱮不如盜也。(荀子 不苟)

(2) 匡章曰、陳仲子豈不誠廉士哉、居於於陵、三日不食、孟子曰、……仲子惡能廉、充仲子之操、則蚓而後可者也、(孟子 滕文公下)

(3) 夫孟子之非仲子也、不待仲子之短矣。(論衡 刺孟)

(4) 神農后稷藏種之方、煮馬屎、以汁漬種者、令禾不蟲、如或以馬屎漬種、其鄉部吏鮑焦陳仲子也、(論衡 商蟲)

(5) 尾生與婦人期於水邊……則不如無信……其父攘羊……則不如無直焉、陳仲子不食母兄之食、出居於陵、欲以爲潔也、則不如無潔焉(貴言 中論)



(6)子曰、直哉、史魚、邦有道如矢、邦無道如矢、君子哉蘧伯玉、邦有道則仕、邦無道、則可卷而懷之 (論語 衛靈公)

(7)又有大夫史鱣、以道去衛、而靈公郊舍三日、琴瑟不御、待史鱣之入、而後敢入、臣以此取之、雖次之賢、不亦可乎 (家語 賢君)

(8)孔子曰、回有君子之道四焉、……史鱣有男子之道三不仕而敬上、不祀而敬鬼、直己而曲人 (家語 六本)

(9)衛蘧伯玉、賢而靈公不用、彌子瑕不肖、反任之、史魚驥諫、而不從、……退彌子瑕而遠之、孔子聞之曰、古之烈諫之者、死則已矣、未下有若史魚、死而屍諫、忠感其君者也、不可謂直乎 (家語 五帝德)

(10)衛靈公之時、蘧伯玉賢而不用、彌子瑕不肖而任事、衛大夫史鱣患之、數以諫靈公、而不聽、史鱣病且死、謂其子曰、我即死、治喪於北堂、……靈公往弔、見喪在北堂、問其故、……易容寤然矢位曰、夫子生則欲進、賢而退不肖、死且不懈、……於是乃召蘧伯玉而進之、以爲卿、退彌子瑕、……論語所謂、直哉史魚者也

(新序 雜事)

(11)史鱣去衛、靈公邸舍三月、…… (說苑 尊賢)

(12)趙簡子將襲衛、使史黯往視之、期以一月、六日而後反、簡子曰、何其久也、黯曰、謀利而得害、由不察也、今蘧伯玉爲相、史鱣佐焉、孔子客焉、子貢使令於君前、甚聽、……其佐多賢矣、簡子按兵而不動耳、

(說苑 奉使)

(13)衛靈問於史鱣曰、政孰爲務、對曰、大理爲務、聽獄不中、死者不可生也、斷者不可屬也、故曰、大理爲務、少焉子路見公、公以史鱣言告之、子路曰、司馬爲務、……子貢曰、教爲務、 (說苑 政理)

(14)枝於仁者、擢德塞性、以收名聲、使天下簞鼓、以奉不及之法、非乎、而曾史是已、 (莊子 駢拇)

(15)使人喜怒失位、居處無常、思慮不自得、中道不成章、於是乎、天下始喬詰卓、鷲而後有盜跖曾史之行、 (莊子 在宥)

(16) 絶<sub>レ</sub>聖棄<sub>レ</sub>知、大盜乃止、……………

故曰、大巧若<sub>レ</sub>拙、削<sub>レ</sub>會史之行、鉗<sub>レ</sub>楊墨之口、攘<sub>レ</sub>棄仁義而天下之德、始<sub>レ</sub>玄同矣、……………彼會史楊墨師曠工倕離朱、皆外立<sub>レ</sub>其德、而以<sub>レ</sub>煇<sub>レ</sub>亂天下<sub>レ</sub>者也、法之所<sub>レ</sub>无<sub>レ</sub>用也、(莊子 胠篋)

(17) 百年之木、破<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>犧尊、青黃而文<sub>レ</sub>之、其斷在<sub>レ</sub>溝中、此犧尊於<sub>レ</sub>溝中之斷、則美惡有<sub>レ</sub>間矣、其於<sub>レ</sub>失<sub>レ</sub>性一也、跖與<sub>レ</sub>會史<sub>レ</sub>行義有<sub>レ</sub>間矣、然其失<sub>レ</sub>性均也。(莊子 天地)

(三)

第三は墨翟。と宋研。である。史記の孟荀列傳(1)の中には若干此の二人を論じて居る。その議論によれば墨翟といふ男は、守禦を善くする人間だ。節用を爲して居る人間だと極く簡單な批評を致して居る。莊子の天下篇(2)の中にも矢張節用といふこと、兼利といふこと。これ<sup>が</sup>その學派の特徴といふものが分れる、けれどもその間にどこか知らん共通の或ものが存するといふ事を暗示せしむる、九流百家の諸子がどこか知らん共通のものが存するといふ事を我々に暗示を與へるのである。それが大變面白いといふことを論じて居る。それから同じ莊子の駢拇篇(3)に至ると、初めて楊朱と相對し、楊墨の説として、之を論じて居る。淮南子の脩務訓(4)の中には之を孔墨の教として論じて居る。墨子の事は既に墨子の書にも現存する故餘り委しく言はなくとも、その位でよいかと思ふ。

宋鉞のことは、孟子の中に論じて居る。孟子の告子篇(5)の中には宋攄といふ名前になつて出て居るが勿論同一人である。或時宋攄が齊の國に出掛けて行かうとする時に偶然孟子と出會つた。其時に孟子が、お前は何の爲に出掛けてゆくのかと尋ねた。彼は答へて、今秦と齊とが戦争をやつて居る、私は之を止させやうと思ふのだと曰つた。孟子は更にどういふ風にして止させる積りであるかと尋ねた。彼は答へて戦争は不利であるからといふ事を論じて論じやうと思ふといふと、孟子はお前の志は大であるが、論ずる所の論據は甚だ間違つて居る。利を以て論ずるといふ事は間違つて居ると批評をしたといふのである。以上の説をみると宋攄の説は大體墨子の説と相合することを知り得る。墨子は兼愛説を立てて論じて居るがそれより更に大きい問題は交利といふ、利の學説である。孟子などが専ら攻撃し

て居るのは其の點であつて今宋程に對してもまた同一點を攻撃したのである。それから此の二人については荀子の非十二子でも論じて居るが、其の言葉は、上<sub>二</sub>功用<sub>一</sub>大<sub>二</sub>儉約<sub>一</sub>而<sub>二</sub>慢<sub>三</sub>差等<sub>一</sub>會<sub>二</sub>不足<sub>一</sub>以<sub>二</sub>容<sub>三</sub>辨異<sub>一</sub>縣<sub>二</sub>君臣<sub>一</sub>。と言ふ數句に盡きて居る。恐らくは之が最もこの學說の缺點に當るのであらう。だから漢書藝文志の方でも、それと同じ様を批評を下して、及<sub>二</sub>蔽者爲<sub>一</sub>之、見<sub>二</sub>儉之利<sub>一</sub>因<sub>二</sub>以<sub>三</sub>非<sub>レ</sub>禮推<sub>二</sub>兼愛之意<sub>一</sub>而不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>別親疏<sub>一</sub>。と云つて居るが要するに此の二人が墨家の大宗たることは言ふまでもない。

次は慎到と田駢とである。此の二人はどういふ人物かといふと此のことはあまり多くは分つて居らぬ。史記の孟子荀卿列傳(6)の中には、此の二人は共に黃老道德の說を學んだと只それだけが出て居る。荀子の儒效篇(7)の中でも若干論じて居るが、其によると若し世の中が秩序立つて來れば、慎到などの學說は起つて來ないといふ批評を下して居る。同じ天論篇(8)の中では慎子といふ男は、後に見る事あつて、先に見る事がないと批評して居る。此は老子は詘に見る事があつて、信に見る事がないと云ふのに相對する批評である。この後に見る事有つて、先に見る事がないといふ事は、どういふことかと言へば、老子の教へでは決して天下の先とならず、人の後について行くのがいふ事で、人の先に立つて行くといふ事はいけないといふのである。以上丈なれば、慎到といふ男は唯黃老の教をその儘守つて居る様に見える。所がなか／＼さういふ隱者でも何でもない。韓非子に難勢(9)といふ議論が出て居つて、その中に甚だしく慎到を打つて居るのである。それは慎到といふ男は、勢といふ事を非常に大切なものとして論じて居る。慎到の言葉によれば龍が雲に乗つてゆくと、天地を覆すだけの力がある。然るに若しその龍が雲を失つて了つた場合にはどうなるかといふと、蜎と同じであつて、何等の働を持たない。非常な利巧な人間が勢を得て活動する場合には、十分に勢を利用して事をなすが如何なる賢者でも勢を失つた時には、何にも出來ない。堯の様には偉い人間でも勢を得ればこそ事をやつて行けるが、勢を失へば何にも出來ない、桀の様な人間でも勢を得ると勝手な事が出来る。賢不肖は勢に及ばないといふのである。この慎子の議論について韓非子の方では難勢の一篇を作つて打つて居る譯であるが、要するに慎子といふ人が、主として勢を論じた人間であるといふ事が分る。そこにゆくと慎子は全く法家の

人間となる。云ふまでもなく法家の主張は、大體三つに分れて居る。一つは申不害一派の説。其は術を論ずる。それに對して商鞅などの説、其の連中は法を論ずる、術と法とはどう違ふかといふと、術といふ事は決して形に現はさない、人君が家來を御するには無言の中に御する。心の中にきめておいて心の中に御さうといふのである。然るに之に對して法を主とする人々に言はせると、さういふ手加減、頭加減をやつてゆくのはいけない、必ず之を名分に現はして行かなければならぬといふのであつて、其が法である。但此の術も法も行き方こそは違ふが、どちらも人君が家來を御する方法であるといふ點は同一である。そして此二つを併せとつたのが韓非子である。韓非子は申商の後に正にこの術と法とを併せて説を立てた。それと相對してもう一つ勢を利用するのが人君御臣の方法だと説くものがある。それがいまの慎子であつて、要するに法家の説は大畧此の三つの大きな系統に分れて居るのである。今日百子全書の中に慎子といふ書がある。それに色々勢を利用する方法が擧げてあるが、今日の慎子といふ書物は、後の書物であつて信用は出来ない。寧ろ韓非子に出て居る難勢の一篇から慎子の主張を見るのが正しい事になつて居る。それから論衡の龍虚の篇(10)の中にも韓非子の難勢の中にある議論と同じ議論が出て居る。それから莊子の天下篇(11)の中にも慎子の批評が出て居る。その批評には、慎到の道は生人の行に非ずと言つて居る。大體慎到については以上の記事文があるので先づ黄老の人、同時に法家の人であるといふ事が分るのである。

次に田駢といふ人物はどんな人物かと云へば、田駢の事は莊子の天下篇(12)の一番初めて出て居る。それによれば、田駢といふ男は彭蒙といふ人に學んで居る。そしてその人々の教といふものは、所謂道といふものは、本當の道ではない。といふ批評が出て居る。又中論の考偽篇(13)の中にも田駢の話が出て居る。それには揚朱、墨翟、申不害、韓非、田駢、公孫龍を同時に擧げて、此等の數人は何れも先王の道を亂す人間であるといふ様に議論をして居る。又淮南子の道應訓(14)によると齊の王様が田駢に、齊の國を治める政治上の意見を聞いた事が出て居る。其の時の田駢の答は、齊の一國を治むる道は論ずるに足りない。若し道を問ふならば、天下を治める道を考へねばならぬといつて居る。そこらが道家の説く所である。大體この田駢に就いてはそれだけしか出て居らぬが、學說の主張

としてどれだけの事があるかといふ事は分りかねる。併し大體この慎到、田駢の二人については諸子書の方では一方は法家の説と見、一方は道家の説として見て居る様である。そこで此の法家と道家とは一見非常に違つたもの考へられるのに、何故に荀子が此の異なる二つの論者を一つの題下に論じて居るかといふことが起つて來る譯であるが、此の道家の説く所は儒教の方がいつも表面から説いて居るに對しいつも人生の裏面を説いて居るのである。其の點の道から道家の思想と法家の思想とは極めて結びつき易いのである。それが爲に此の二思想は往々相一致して來るのである。今荀子がこの慎到。田駢を一緒にして論じて居るといふ所にも、其の點が見られるのである。そして荀子は此の二人に、尙法而無法。下脩而好作といふ批評を下して居る、先づ其の弊害の方面としては主として二人を法家として批判したのであらう。

(1) 蓋墨翟宋之大夫、善守禦爲節用。或曰、並孔子時、或曰在<sub>ニ</sub>其後、 (史記 孟荀傳)

(2) 以<sub>ニ</sub>繩墨自矯、而備<sub>ニ</sub>世之急、古之道術有<sub>ニ</sub>在<sub>ニ</sub>於是<sub>ニ</sub>者、墨翟禽滑釐聞<sub>ニ</sub>其風<sub>ニ</sub>而説<sub>レ</sub>之、

作<sub>ニ</sub>爲非樂、命<sub>レ</sub>之曰<sub>ニ</sub>節用<sub>ニ</sub>、生不<sub>レ</sub>歌、死无<sub>レ</sub>服、墨子汎愛兼利、而非鬪、 (莊子 天下)

(3) 駢<sub>ニ</sub>於辯<sub>ニ</sub>者、纍瓦結繩、竄句游心、於<sub>ニ</sub>堅白同異之間<sub>ニ</sub>、而做<sub>レ</sub>跬、譽<sub>ニ</sub>无用之言<sub>ニ</sub>、非乎、而楊墨是已、 (莊子 駢拇)

(4) 孔子無<sub>ニ</sub>默突<sub>ニ</sub>、墨子無<sub>ニ</sub>煖席<sub>ニ</sub>、 (淮南 修務)

(5) 宋徑將<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>楚、孟子遇<sub>ニ</sub>於石丘<sub>ニ</sub>、曰、先生將<sub>ニ</sub>何之<sub>ニ</sub>、曰、聞<sub>ニ</sub>秦楚之構<sub>レ</sub>兵、……曰、先生之志則大矣、先生之號則不可、……是君臣父子兄弟、去<sub>レ</sub>利懷<sub>ニ</sub>仁義<sub>ニ</sub>、以相接也、然而不<sub>レ</sub>王者、未<sub>ニ</sub>之有<sub>ニ</sub>也、 (孟子 告子下)

(6) 慎到趙人、田駢接子齊人、環淵楚人、皆學<sub>ニ</sub>黃老道德之術<sub>ニ</sub>、因發明、序<sub>ニ</sub>其指意<sub>ニ</sub>、故慎到著<sub>ニ</sub>十二篇<sub>ニ</sub>、(今慎子劉向所定有四十一篇) 環淵著<sub>ニ</sub>上下篇<sub>ニ</sub>、而田駢接子、皆有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>論焉、 (史記 孟荀)

(7) 量<sub>レ</sub>能而授<sub>レ</sub>官、使<sub>レ</sub>賢不肖、皆得<sub>ニ</sub>其位<sub>ニ</sub>、能<sub>レ</sub>不能<sub>レ</sub>皆得<sub>ニ</sub>其官<sub>ニ</sub>、萬物得<sub>ニ</sub>其宜<sub>ニ</sub>、事變得<sub>ニ</sub>其應<sub>ニ</sub>、慎墨不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>進<sub>ニ</sub>其談<sub>ニ</sub>、惠施鄧析不<sub>レ</sub>敢竄<sub>ニ</sub>其察<sub>ニ</sub>、 (荀子儒效)

(8) 慎子有<sub>レ</sub>見<sub>ニ</sub>於後<sub>ニ</sub>、無<sub>レ</sub>見<sub>ニ</sub>於先<sub>ニ</sub>、老子有<sub>レ</sub>見<sub>ニ</sub>於誦<sub>ニ</sub>、無<sub>レ</sub>見<sub>ニ</sub>於信<sub>ニ</sub>、墨子有<sub>レ</sub>見<sub>ニ</sub>於齋<sub>ニ</sub>、無<sub>レ</sub>見<sub>ニ</sub>於畸<sub>ニ</sub>、宋子有<sub>レ</sub>見<sub>ニ</sub>於少<sub>ニ</sub>、無<sub>レ</sub>見<sub>ニ</sub>

於多有後而無先、則群衆無門、…… (荀子 天論)

(9) 慎子曰、飛龍乘雲、騰蛇遊霧、雲罷霧霽、而龍蛇與蟻螳同矣、則失其所乘也、賢人而詘於不肖者、則權輕位卑也、不肖而能服於賢者、則權重位尊也、堯爲匹夫不能治三人、而桀爲天子能亂天下、吾以此知勢位之足恃、而賢智之不足慕也、 (韓非 難勢)

(10) 慎子曰、蜚龍乘雲、騰蛇遊霧、雲罷雨霽、與蟻螳同矣、 (論衡 龍虛)

(11) 齊萬物以爲首、慎到棄知去己、而緣不得已、冷汰於物、以爲道理、……豪傑相與笑之曰、慎到之道、非生人之行、至死人之理、適得怪焉、 (莊子 天下)

(12) 田駢亦然、(與慎子同) 學於彭蒙、得不教焉、……

其所謂道、非道、而所言之、不、免於非、彭蒙田駢慎到、不、知道、雖、然概乎皆嘗有聞者也、 (莊子 天下)

(13) 仲尼之沒、于今數百年矣、……於是惑世盜名之徒、囚夫民之離聖教日久也、生邪端、造異術、……

昔楊朱墨翟申不害韓非田駢公孫龍、汨亂乎先王之道、譎張乎、戰國之世、然非人倫之大患也、何者術異乎聖人者、易辨、而從之者不多也…… (中論 考偽)

(14) 田駢以道術說齊王、王應之曰、寡人所、有齊國也、道術難、以除患、願聞、國之政、田駢對曰、臣之言、無、政而可、以爲、政……雖、無、除、其患、天地之間、六合之內、可、陶冶而變化、也、齊國之政、何足、問哉 (淮南 道應)

(四)

次は惠施と鄧析とである。惠施は莊子と仲が好かつた故、惠施の話は莊子の中に度々出て來てゐる。至樂篇(1)の中に莊子の妻が亡くなり、そこに惠施が弔ひに來た話がある。先づ惠施の家へ行くと、莊子は自分の妻が死んでゐるにも拘らず、胡床をかいて、歌を歌つてゐた。そこで惠施も驚いて言つた、如何に老子の教であらうと、今妻が死んでゐる時に歌を歌はなくともいふではないかと尋ねると。莊子は、否然らず、人間の死生は四季の變遷の如きもので、春去り夏來り、夏去り秋去るといふ様なものなれば悲しむに及ばない。のみならず今此の人は巨室の中に寢てゐ

る事が出来たから自分は歌はずに居られないといつたのである。この巨室とは本當の人間の行くべき所といふ意である。又莊子との交際の事は。除無鬼篇(2)に出てゐる。之によると惠施の方が先きに死んだことになる。そこで莊子はその墓に參つての歸途、從者に向つて言ふ様、夫子の死してより我以て質を爲すなし、我與に言ふべきなしと云つておる。即ち語るべき人を失ひ、質問が出来なくなつたといつて嘆息したのである。之と同話が淮南子の脩務訓(3)にも出てゐる。之等の點から考へると、大體惠施といふ人物は莊子と同流の人間であつて、而して未だ十分悟り切らぬ人間だつた事が解るのである。逍遙遊(4)の中に出てゐる話であるが、惠施が莊子に話しかけた、魏の國王は自分に大きな瓢單の種をくれた、それを播いた所が、五石を入れる程の瓢單がなつたが、大きい丈で役にたゝぬから壊したといふのである。其に對して莊子は、汝には蓬の心がある。かゝるものが出来たら割つて、船にして江湖に遊んだらいいでないかと諭した。又惠施いふ。自分に樗といふ大木がある。之も大きい丈で惡木で役にたゝぬと云ふと、莊子は、かゝる大木なれば無何有の郷(5)の植ゑ、徐ろにその下で逍遙して遊んだら好いちやないかと諭した。此等の文で見ると、莊子の方が一步上手になつて出ておるのである。未だ惠施に就いては人間臭い所も見えておる。說苑雜言(6)の中に出てゐる、梁國即ち魏の大將がなくなつた。すると惠施が直ぐその後を逐つて、梁國に出掛けた。周章(7)た爲か、渡場の水中に落ちて、危く船人に助けられた。船人がいふに、何故汝はかく急いで、落ちる様な事をしたかといふと、惠施は、梁國の大將が死んだ故、自分はその後に行き大將にならうと思つて出掛けたのだが、急いだため落ちたのだと云つて、いたく船人に冷かされてゐる。之と同話が莊子秋水篇(8)に出ておる。こゝには惠施が梁國の宰相になつておる。そこへ莊子が遊びに行つた。すると惠施は慌てゝ、今度來た莊子は自分の位置を奪ふ爲めに來たのだらうといふのである。それに對して莊子は冷然として、安心するが宜しい。鴉が腐鼠一匹捕へて居ると假定する。その上に大鵬が通つて行く。この鼠を奪はれると思つて鴉は心配して、天に向つて、怒つてみたが、大鵬はかゝる事に目もくれず鷹揚として進んで行つたといふ事である。汝は梁の宰相を大切なものと考へてゐるが、我々からみればそんなものは鴉の捕へた腐鼠にも嚇(9)らないのだと冷かしたのである。此等の點から考へると、惠施は未だ悟つて

ゐなかつたといふ事が解る。又惠施は若干政治にも關係してゐた様である。墨子非儒篇(7)によると、齊が魯を伐たうとした時、魯の國には、孔子の門人子貢がゐて、齊に伐たれては大變だといふので、之に對する策畧を惠施の所へ相談に來た話がある。又韓非子説林(8)の中に、鄒の殿様が、自分の家來の田駟といふ人に欺かれたといふので怒り殺さうとした、といふ話がある。其時に田駟も困り抜き、惠施の所へ相談に行つた。すると惠施は引受け、殿様に向つて、片眼を閉ぢて、嘲弄したら如何なさるかと問ふと、殺して終ふ、と、それでは盲が兩方目を閉ぢて嘲弄したらどうするかと問ふと、仕方がない、と答へた。すると彼の田駟は人を欺くといふ事に就ては既に心が育してゐる。即ち彼は殺人の盲目的常習犯であるから、彼を殺すことは無意義の事ではないかといつて、一種の詭辯を弄して田駟を助けたといふ話がある。此とは異なるが惠施の詭辯に巧であつたといふ話が、淮南子道應訓(9)の中に出てゐる。惠施が梁の惠王の所に面會に行くと、王は喜び、惠施の論を傾聴し、やがてその論の當否を翟煎といふ人に話した。すると其れに對して翟煎は成程立派な説だと答へた。然らば此の論は直ぐに政治に施していゝかと問ふと、翟煎は不可なり議論は面白いが政治には行ふ事は出来ぬ。由來國治といふ事は禮によつて治むべきで、辯説を以て治むべきでないといふ批評をしたのである。此等の點から考へると惠施は辯説の人、詭辯家である。即ち秦時代に於ける名家の一方の雄將なる事が分る譯である。莊子秋水篇(10)によると、莊子と惠施と濠梁といふ所に遊びに行つた話がある。下を見たと魚が遊んでゐる、先づ莊子が口を切つた。下方に魚が楽しんでゐる、あれは魚の楽しみだ。その言葉を聞き惠施は云つた、汝は魚でないから魚が楽しんでゐるかゝは分らないか。すると莊子は成程僕は魚でない。が汝は僕でないから僕が魚の心を知つてゐるかゝは分らないか。所が又惠施がいつた。成程僕は君ではないが、君は魚でない事も事實だから魚の心が分る筈がないと。結局最後になつて莊子が口を切つて、請ふ其本に立返れよ。汝が僕に對して、汝は魚ではないから汝には魚心は分らぬと言つた時に、既に汝は汝の心を付度し得るといふ事を承認し得るといふ。少し議論が複雑になつたが、その時の莊子の論は、惠施が莊子に問ふて汝は魚でないから魚心は分らぬと言つた時に、惠施は自分は莊子の心を付度し得るといふ前提をおいてゐる。その前提が許されるならば、僕が



魚心を忖度し得るといふ前提をも許さなければならぬとかういふ議論を指してゐるのである。之が則ち當年起つた名家の議論の片鱗である。此等以後になると名家の中に、極めて下品な議論が多く出てゐる。荀子不苟篇(11)等の中に、かゝる事を言つてゐる。山と淵とは平だ。天と地とは合してゐる。卵には毛がある。大體かゝる議論が盛になつてゐる。その後になると、白馬非馬論とか堅白論とかいふものになつて、只世の中を騒がせて居る。尤も此等とても全然意味のない事を言つてゐる譯にあらず。公孫龍の白馬は馬に非ずといふのも、墨子の白馬は馬なりといふのも、それだけ聞いておれば議論の筋は立つてゐるが、要するに詭辯の爲めの詭辯、論理の爲めの論理に外ならぬ。更に莊子の齊物論の中にも、惠施の話が出て居るが、大體かゝるものである。今荀子が惠施を非としたのは、即ち其の詭辯の學風を非としたものである。

(1) 莊子妻死、惠子弔之、莊子方箕居、鼓盆而歌、惠子曰、與人居、長子、老身死、不哭亦足矣、……莊子曰、……今又變而之、死、是相與爲春秋夏冬四時行也、人且偃然、寢於巨室、而我嗷々然、隨而哭之、自以爲不遁乎命、故止也、(莊子 至樂)

(2) 莊子曰、儒墨楊乘(公孫龍字)與夫子爲五、果孰是邪、惠子曰、今夫儒墨楊乘、且方與我以辯、相拂以辭、相錯以聲、而未始吾非也……莊子送葬、過惠子之墓、顧謂從者曰、……自夫子之死也、吾先以爲質矣、吾先與言之矣、(莊子 徐無鬼)

(3) 惠施死、而莊子寢說言、見世、莫可爲語者也、(淮南 脩務)

(4) 惠施謂莊子曰、魏王貽我大瓠之種、樹之成、而實五石。莊子曰、……天子猶有蓬之心也夫、惠子曰、吾有大樹、人謂之樗……莊子曰、今子有大樹、患其無用、……安所困苦哉、(莊子逍遙遊)

(5) 梁相死、惠子欲之、梁、渡河而遽墮水中、船人救之、船人曰、子欲何之、而遽也、曰梁無相、吾欲往相之、船人曰、子居船楫之間、而困、無我則子死矣、子何能相梁乎、惠子曰、子居艘楫之間、則吾不如子、至於安國、家全社稷、子之比我家、如未視之狗耳、(說苑 鄭言)

(6) 莊子往見之曰、南方有鳥、其名爲鷦鷯、子知之乎、夫鷦鷯……非梧桐不<sub>レ</sub>止、非練實不<sub>レ</sub>食、……今子欲<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>子之梁國<sub>二</sub>而嚇<sub>レ</sub>我邪、 (莊子 秋水)

(7) 齊將<sub>レ</sub>伐<sub>レ</sub>魯、子貢曰、賜乎、……乃遣<sub>レ</sub>子貢<sub>二</sub>之<sub>レ</sub>齊、因<sub>レ</sub>南郭惠子<sub>二</sub>以<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>田常<sub>二</sub>、勸<sub>レ</sub>之伐<sub>レ</sub>吳、 (墨子 非儒)

(8) 田駟欺<sub>レ</sub>鄒君、鄒君將<sub>レ</sub>使<sub>レ</sub>人殺<sub>レ</sub>之、田駟恐、告<sub>レ</sub>惠子、惠子見<sub>レ</sub>鄒君曰、今有<sub>レ</sub>人、見君、則眇<sub>レ</sub>其一目、奚如、君曰、我必殺<sub>レ</sub>之、惠子曰、瞽兩目眇、君奚爲不<sub>レ</sub>殺、君曰不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>勿眇、惠子曰、田駟東慢<sub>レ</sub>齊侯、南欺<sub>レ</sub>荆田駟之於<sub>レ</sub>欺<sub>レ</sub>人瞽也、君奚怨<sub>レ</sub>焉、鄒君乃不<sub>レ</sub>殺、 (韓非 說林)

(9) 惠子爲<sub>レ</sub>惠王<sub>二</sub>爲<sub>レ</sub>國王<sub>二</sub>、……王甚說<sub>レ</sub>之、以示<sub>レ</sub>翟煎<sub>二</sub>曰善、惠王曰、善可<sub>レ</sub>行乎、翟煎曰、不可、惠王曰、善而不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>行何也、翟煎對曰、……治<sub>レ</sub>國有<sub>レ</sub>禮、不<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>文辯、故老子曰、法令滋新、盜賊多有、此之謂也、 (淮南 道應)

(10) 莊子與<sub>レ</sub>惠子<sub>二</sub>遊<sub>レ</sub>於濠梁之上<sub>二</sub>、莊子曰、鯉魚出遊從容、是魚之樂也、……子曰、汝定知<sub>レ</sub>魚樂云者、既已知<sub>レ</sub>吾知<sub>レ</sub>之、而問我、我知<sub>レ</sub>之濠上<sub>二</sub>也、 (莊子 秋水)

(11) 山淵平、天地比、齊秦襲、入<sub>レ</sub>乎耳<sub>二</sub>出<sub>レ</sub>乎口<sub>二</sub>、鉤有<sub>レ</sub>須、(媯)卵有<sub>レ</sub>毛、是說之難<sub>レ</sub>持者也、而惠施鄧析能<sub>レ</sub>之、君子不<sub>レ</sub>貴者、非<sub>レ</sub>禮義之中<sub>二</sub>也、 (荀子 不苟)

(五)

次に鄧析は如何なる人かといふに、法家として論すべき人である、淮南子汜論訓(1)中に、孔子が少正卯を誅したといふ事と、鄭の子産が鄧析を刑したといふ事を以て同じ手柄であると論じ、同じ淮南子詮言訓(2)中に鄧析は辯に巧にして、法を亂るといつて居る、又鹽鐵論の疾貧論(3)中に、淮南子の汜論訓と同じく、周公が管蔡を誅戮した事、孔子が少正卯を誅した事、鄭の子産が鄧析を誅した事は同意義の同功績の事であると論じて居る。又列子、力命(4)中にも其と略同じ議論がある。かく論じ來ると惠施と鄧析との共通點は殆ど見出し得ぬ。只僅かに說苑反質篇(5)中にのみ其の共通點の閃きが表れてゐる。衛の五大夫が毎日自ら甕を背負ひ、井戸に入り水を汲み、それを畑に灌いでゐる。其を見て鄧析は、汝は實に氣の長い人間だ。そんな事をせずに、釣瓶を用いたら善いではないかと教

へた。すると五太夫は自分とても知つてゐる。然し先生から、かゝる事を教はつた事がある。機械を用ふる巧あるものは又機械の失敗があるものだと、今自分も其れを恐れるから、態々釣瓶を用ひずに毎日かく水甕を背負ひ乍ら水を汲み、自ら水を漑いでゐるのだと答へた。それを聞いてから鄧橋はいたく感動して顔面蒼白になり歩いて行つた。門人達が心配し、若し彼が何か失禮な言でも言つたのならば、我々が復仇してやると言ふと、否よしてくれ自分は今日真人に會つて來たのだといつた。此話によると鄧橋も亦老莊の流を引いておる故、其點が惠施と共通な點である。其の共通點を荀子は論じて、不<sub>レ</sub>法<sub>ニ</sub>先生<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>是<sub>ニ</sub>禮儀<sub>ニ</sub>而好治<sub>ニ</sub>怪說<sub>ニ</sub>玩<sub>ニ</sub>畸辭<sub>ニ</sub>甚察而不<sub>レ</sub>惠、辯而無<sub>レ</sub>用、多事而寡<sub>レ</sub>功不<sub>レ</sub>可<sub>ニ</sub>以爲<sub>ニ</sub>治綱紀<sub>一</sub>といつておる。此の議論は惠施の方にはよく當つておるが、上述の鄧橋には必ずしも的中してゐるとは思へぬ。何んとなれば、法家の系統と道家の系統とを以てゐるからである。併し恐らくは上述の文獻以外鄧橋にも十分名家風の點があつたのであらう。今日の鄧橋などいふ怪しい典籍以外に何か残つてゐたならば、此事が證明されるであらうに、その出來ぬのは惜しい次第である。以上で十人濟んだ。最後に出て來るのは、子思と孟子であるが、之は述べぬ。述べなくとも、子思は中庸、孟子は孟子の著者であることは周知の事と思ふ。大體十人に就いては先秦諸子の間に、上述の事が議論せられてゐるのである。そこでこれより議論を立てるのである。子思、孟子は儒家、同じ儒家の荀子が、非難惡口してゐる。故は如何といふに、之には種々の説がある。第一韓詩外傳の中に同じ荀子の非十二子篇の文を引いており乍ら、此の子思、孟子に干する非難はない。そこで宋の王應麟の困學紀聞等は論を立て、韓詩外傳に既に思孟の二子がないから恐くは、荀子の非十二子にある思孟關係の文は後人の讒入であらう。荀子として矢張この二人の惡口を言つた事はないであらうといふかゝる議論をしておる。そは果して、かくすべきか、すべからざるか、私の方では荀子の非十二子は、矢張始めから非十二子としてあつたのであらうと考へる。而して儒流の荀子が何故同じ思孟を非難してゐるかに就いて別に議論があるが、後日に譲る事にする。以上非十二子篇を通觀すると、荀子はこの篇に於て先づ一番始めの、它豈、魏牟の所で道家を打つて居る。陳仲史鮪の所で雜家を打つて居る。墨翟宋鉞の所で墨家を打つてゐる。慎到田駢の所で法家を打つておる。惠施鄧橋の所で名家を打つて居る。子思

孟軻の所で儒家を打つて居る。勿論その間に名家の中にも、名家以外に法家と道家との系統があつたり、法家の中にも道家の系統があつたりするが、大體上述の形になつてゐる。而して之が後に發達すると、藝文志に明記せられてゐる九流百家の根源をなすのである。

(1) 孔子誅少正卯、而魯國之邪慝、子產誅鄧析、而鄭國之姦禁、以近論遠、以知大也 (淮南 范論)

(2) 鄧析公孫龍、粲於辭而賀名、鄧析巧辯而亂法 (淮南 詮言)

(3) 周公非不正管蔡之邪、子產非不正鄧析之偽也、……周公誅管蔡而子產誅鄧析也、刑誅一施、民遵禮義矣 (鹽鐵 疾貧)

鄧析謂伯豐子曰、汝知養養之義乎、受人之養而不能自養者、犬豕之類也、養物而物爲我用者、人之力也、使汝之徒食而飽、衣而息、執政之功也、長幼群聚、而爲宰藉庖厨之物、奚異犬豕之類也、伯豐子不應、伯豐子之從者、越次而進曰、大夫不聞齊魯之多機乎、……執政者、迺吾之所使、子奚矜焉、鄧析无以應、(列子 仲尼)

(4) 鄧析操兩可之說、無窮之辭、當子產執政、作竹刑(簡法)鄭國用之、數難子產之治、子產屈之、子產執而戮之、俄而誅之、然則子產非能用竹刑、不不得不用、鄧析非能屈子產、不不得不屈、子產非誅鄧析、不不得誅也、(列子 力命)

(5) 衛有五大夫、俱負缶而入井、灌韭、終日一區、鄧析過、下車、爲教之曰、爲機、重其後、輕其前、曰橋、終日溉韭、百區不倦、五大夫曰、吾師言曰、有機知之巧、必有機知之敗、我非不知也、不欲爲也、子其往矣、我一心溉之、不知改已、鄧析去、行數十里、顏色不悅、自病、弟子曰、是何人也、而恨我君、請爲君殺之、鄧析曰、釋之、是所謂真人者也、可令守國、(說苑 反質)

(六)

此から非十二子を読み、我々の問題になる事を少し考へて見たいと思ふ。先づ第一に非十二子を通じて見て、荀子と云ふ學者が一體どう云ふ學系の人で有るかといふ事を考へて見やうと思ふのである。

昔から儒學といふものが立ち、此の儒學の大宗と稱する者を二人考へて居る。その一人は孟子であり、後の一人は荀子であり而して孔子によつて立てられた儒學といふものが、此の二人の大宗によつて大成せられたのである。之が一般の定説である。そこで問題になる事は、その儒學の系統を引いて居るといふ荀子が、此の非十二子(1)の文中に於て一方に於ては子思孟子を攻撃し、又一方に於ては孔門の子張子夏子游等の攻撃をやつて居る。之はどういふ譯であるか。今荀子の子思孟子を攻撃して居る所を見ると、大體其の攻撃點は二段に分れる。一つは子思孟子が五行を喧しく云ふのが氣に入らぬといふのである。聞雜博案往舊造說謂之五行。併し此の五行が何であるかといふことはよく分つて居らない。或者は仁義禮智信だといひ、或者は陰陽五行だといふ、私は假りに此の五行は王道ではあるまいかといふ説を出したのである。王道にした所で若しくは、仁義禮智信の五行にした所で、此等は儒學の最も根本になるべき説である。それを子思孟子が口にして居るからと言つて荀子が之を攻撃する理由は明かでない。第二には子思孟子が好んで往舊を案すると云ふ事で、併し此とても儒學の方では昔から堯舜を祖述し文武を憲章すると云ふ點を尙び述べて作らずといふ孔子の教義を守つて居るのであるから、往舊を案じたからと云つて荀子から叱られる理由はない様に思ふ。次に荀子の儒家を攻撃する點は幽隱而無說、閉約而無解といふのである。此の句は解釋によつてどうにもなるが要するに併し此の幽隱閉約といふことも今述べた孔子の述而不作といふ學風に基いて居るのであるから、それを攻撃するといふ荀子の考は依然として明かでない。かういふ點を考へると荀子といふ人は一體儒家の系統の人なりや否やといふ疑ひが起つて來るのも當然であらうと思ふ。(2)子張、子夏、子游を放撃して居るのは些細の事であるから或は問題にならないかも知れぬが、併し此等の人々は何れも孔門の高弟の人であるから、此を攻撃するといふ點で荀子が正統の儒家でないといふ事の理由として考へれば考へられる譯である。以上述べた幾多の立場を考へて荀子を攻撃した人が支那に於ては宋の時から既に起つて來て居る。即ち蘇東坡は荀卿論(3)といふ一篇を著して荀子

は非十二子に於て儒家を攻撃して居る以上、此は正統の儒家ではあるまいといふ議論を吐いて居るのである。又此等と別箇の立場から見ても荀子は正統の儒家ではないかも知れぬと云ふ他の論證がないではない。其は荀子の門人中に李斯や韓非などが出て居るといふことである。此等の人々は云ふまでもなく有名な刑名家で有る、由來刑名家の議論といふものは儒家の徳治主義の議論とは相容れない論である。然るに今斯かる學風の門人が荀子の門下から出て居るから、何等か荀子の學説の中に純粹の儒家でない系統が存在して居りはせぬかといふ疑は當然起つて善い譯である。前述の蘇東坡の荀卿論の中には矢張此の點を論じて居るのである。殊にまた李斯といふ男は單に刑名の學風を唱へて居るのみならず、秦始皇に勸めて書物を焚き儒者を坑にせしめた男である。斯かる門人を出したといふ點から考へみても荀子は正しい儒家ではあるまい、若くは荀子の學説の中には多分に儒家と相容れない考があるであらうと考へられる。第三に荀子の儒家として困難なる立場は、荀子が性惡論を唱へたといふ事である。儒家の傳統的の主張は、性善を第一に考ることである。天と人とは一つである。天には意志あり目的があるが故にその天命を受けて來た人間の性の中にも正しきに向ふ一定の傾向があるといふのである。此の議論の根據があるから正統の儒家から言へば、當然性善説を主張せざるを得ない、然るに荀子は其の反對の性惡説を主張して居るから此の點からも亦荀子は儒家に非ずといふ事が考へられるのである。そしてその點について最も荀子を攻撃して居るのは、宋の（朱熹）徐積である。徐積は節孝先生と言ふが餘り儒學史などには出て來ない人であるが、立派な先生である。其の節孝先生文集の中に荀子篇といふ一つの文章があるが、其の中に九ヶ條ほどの例を擧げて、荀子は儒家ではないといふ結論をして居るのである。が其の第一は非十二子に於て、荀子が子思孟軻或は孔門の高弟を攻撃して居るといふ點。第二は荀子の門下から李斯の如き人物が出たといふ點。第三は此の性惡説を主張したと云ふ點を擧げて居る。要するに従來荀子を攻撃する人は必ず此の三點に於てするのである。所が私は今此の三箇條について一々辯駁を加へ、矢張荀子は正統の儒家であるといふ事を主張して行きたいと思ふ。今論理の都合上、此の三點を逆に言つて辯護せう。先づ性惡論、此の事について如何に荀子を辯解するかといふと。私は荀子が性惡論を唱へた事は恐らくは荀子の本意ではなからう。一つの矯飾の

言葉であらう。若し人間の性が善であるといふ事を論じて居ると、人間は鬼角修養を怠る。之を矯めむが爲に性惡といふ事を鼓吹して、世の中の人を奮勵せしめようとしたのではあるまいかと言ひたいのである。其の證據に荀子は性惡論を掲げて論ずる場合には性惡を主張して居るが、其以外の場合に於ては文章の中の所々に人間の性善を肯定して居る文句があるのである。これは少し荀子を注意して讀む人にはすぐ分るのである。つまり荀子は袴を着て論ずる時には性惡を主張するが、浴衣を着てくつろぐ場合には多くの性善の本音を吐くといふのだから、荀子の性惡論はどうも一つの矯飾の言葉としか思へぬのである。此の事は我々も勿論さう考へるのであるが、清朝の學者も既に夙に此の事を言つて居るのである。例へば四庫提要（4）などではかういふことを言つて居る。荀子といふ書物は全體學問を勸める事を目的として居る。其の學問といふ事は禮を修めると云ふ事を主なるものとして居る。若し人間の性が善であるといふことを論ずれば自然人間が、性善の説を頼んで、學問を廢する事にもならう荀子は其を嫌ふから、そこで激して性惡の説を成したのだらうとかう論じて居るのである。それから荀子集解を書いた清朝晩年の學者王先謙は、矢張荀子集解（5）の序文の中に於て、荀子が世の中の亂れて居るのを救ふ爲に世の中の誹を覺悟して無理に性惡の議論をしてやつたといふ。その心情は寧ろ悲しむべきだといふ議論をして居る。此の二人の論は肯定すべき議論だと思ふ。其以外荀子が性惡論を立てた他の一つの理由は、戰國諸子の異を立つるを以て高しとする氣風が動いて居ると私は思ふ。之は勿論荀子の悪い方面であるが、概して戰國の諸子といふものは、異を立てる事に急であつたのである。當時孟子が既に性善論を立て、世の中に活動して居た後だとすると、荀子も何か一つ異を立てなければ立場がない。そこであまり尊い考へではない寧ろ賤しむべき考へからではあつたが、勝異の氣風に動されて荀子は心ならず性惡論を立てたのではあるまいかと私は推察して居る。してみると荀子が性惡論を立てたからと云つて何も荀子が儒家の正統ではないといふ理由にはなるまいと思ふ。第二に荀子が李斯の如き門人を持つたといふ事である。之については少し事實を調べて見なければならぬのである。先づ第一李斯が書物を焚き、儒者を坑にしたといふ事である。成るほど李斯が始皇に勧めて書物を焚いたといふ事實は史記の始皇本紀の三十四年の條に、又儒者を坑にしたといふ事は同じ

く秦の始皇本紀の三十五年の所に出て居る。之は確かにあつたに違ひないと思ふが、併し坑にした數は果してどれだけであつたか、書物を焚いたのは果してどれだけか其文は明瞭でないのである。史記には坑にしたのは四百六十人と出ては居たが、果してそれが皆學者であつたか或は又つまらぬ奴であつたか分らぬ。本を焚いたと云つても恐らくは其は博士官の、大學の先生の持つて居るものだけを焚いたので、必しも一般のものを焚いたのではあるまい。どちらにしても世に傳へられた程大きな事實ではなかつたに違ひないと思ふ。又假りに其の事實があつたに於て、それと荀子との間に果してどれ丈の關係があるか、清朝の桐城派の大家の姚姬傳といふ人は、惜抱軒文集の中に李斯傳といふ一つの傳を書いて、その中に始皇の焚書坑儒と荀卿との間には何等の關係がないといふ事並びに又假に、李斯と焚書坑儒との關係があつたにした所で、その爲に李斯の先生の荀子に禍を及ぼすことは違つてゐると論じて居るが私なども其の議論には賛成である。門人に少し悪いものが出たからと言つて、一々先生までが悪いと曰はれてはたまつたものではない。宋の唐仲友(6)はまた別の論を出して居る。其は荀子は當年の大學者であつた。であるから澤山の門人が居つたに違ひない、李斯とか韓非とかいふ門人は偶々世の中に知られて居つたといふに止つて、門人中の數から云へば勿論九牛の一毛の人間である。その一二の特殊のものがあるからと云つて之を以て荀子を責めるのは甚だ苛酷であると斯ういふ議論をして居る。明朝の楊震も其の著丹鉛叢錄(7)といふ中に畧々同一の論をして居る。世人は荀子の門人中に李斯韓非があるといふ事實を以て荀卿の學問の純粹でない事を證明しようとして居るが、併し若しさういふ事を言ふならば、晝寝した宰予があるからと云つて孔子を非難するかと突き込んで居る。それも至極當然の事である。此等の辯解文で最早門人の故を以て荀卿の悪口を言ふことの非なるは明かだと思ふ。併しもう一つ私は別方面から荀子辯護を試みたいと思ふ。其は荀子の教の根本が禮である。其の門人の李斯、韓非子が唱へたものが刑名の説であるが、法であるといふ事である。思ふに禮と法といふものは、もと同一概念から出たのではあるまいか。禮といふものは、事柄の亂るゝ事を未だ起らざる先に防ぐ所のものである。法といふのは事の亂れたものを後から防がうとする所のものである。此の二つは本と末との區別こそあれ、共に之は亂れるのを防ぐ規制の概念である。異な



る所は唯本をなすべきか、末をなすべきかといふ點に存するのである。元來荀子は儒家であるから、勿論その立場としては務本の説である。斯く務本の立場から立つたのであらうが、其の末流の徒が誤つて之を收末に陥いらしめたといふことはあり得る事である。一つの正しい學説が、末流に至つて他の間違つた方面に流れるといふ事は強いて怪しむに足りないことである。況んや荀子は決して韓非子、李斯の徒の收末の議論を許しては居らない。其の事は荀子の議兵篇(8)の中に明瞭に言つてある。李斯は孫卿子即ち荀子に爲政上の質問をして武力を以て國を治めたらといふ様な事に論じ至り、時に最後に荀子は答へて今女不<sub>レ</sub>求<sub>ニ</sub>之於本<sub>一</sub>而索<sub>ニ</sub>之於末<sub>一</sub>、此世之所<sub>ニ</sub>以亂<sub>一</sub>也。と説明してある。つまりお前の議論は之を本に求めずして、末に求めて居る。それは世の中の亂れる本であるから收末の事はやめて、早く務本に立ちかへれよといふことを教へて居るのである。此の句から見れば飽くまで荀子は務本の説であつて、之を誤つて收末の法に流れた李斯などは流れた人の個人的誤である。であるから門人に李斯、韓非があつても、矢張荀子の儒家の正統たることは差支なからうと思ふのである。

それから第三番目に荀子が子思孟子などの攻撃をやつたといふことであるが、之はあまり深く論ずるまでの必要はなからうと思ふ。成程孔門の正統を得たといふ子思孟子を攻撃するといふけれども、子思孟子に於ても、正しき儒家の見方から見たならば、攻撃する場所はあり得るに違ひない。だから其の點を攻撃したとせばちつとも差支へない。味方を攻撃するといふのも或は味方を磨いてゆく一つの方法でないとも限らぬ。然るに此ある故を以て直に荀子は儒家に非ずといふ事を論ずるのは間違ひであらうと思ふのである。尤も之についても叮嚀に荀子の辯解を試みて居る人もある。前にも一寸述べた韓詩外傳の中には子思と孟子の攻撃は出て居らない。だから荀子の文はもとく非十二子であつたのであらうといふのである。宋の(上)王應麟の困學紀聞の説が其である。けれども強ひて王應麟の様には言はなくともよい。荀子は事實思孟の惡口を云つたのであらう。兎角學者といふものは人の惡口を言ひたがるものである。孟子なども人の惡口を言つて居る。孔子の門人でさへ子夏と子張とは惡口の言ひ合ひをしてゐる。今の學者などは尙更人の惡口を言つて居る。決して善い事ではないが、それを以てさう強く攻撃し、此あるが爲に荀子が正統の儒家に

非ずとまでいふ論法は成り立たぬ。以上によつてたとひ非十二子の文があつても矢張荀子は儒家の大宗として差支へなからうと考へるのである。

(1) 案ニ往舊ニ造レ説、謂ニ之五行ニ甚僻違而無レ類。幽隱而無レ説。閉約而無レ解。案飾ニ其辭ニ而祇ニ敬之ニ曰。此真先君子之言也。子思唱レ之孟軻和レ之、世俗之溝猶發儒。嗙々然不知ニ其所レ非也。遂受而傳レ之以爲ニ仲尼子游爲レ茲厚ニ於後世。是則子思孟軻之罪也。

(2) 第ニ佗其冠ニ神ニ禪其辭ニ禹行而舜趨。是子張氏之賤儒也。正ニ其衣冠ニ齊ニ其顔色ニ、嗙然而終日不言。是子夏氏之賤儒也。偷儒憚レ事無ニ廉恥ニ而奢ニ飲食ニ、必曰、君子固不用レ力、是子游氏之賤儒也。

(3) 昔者常怪李斯事ニ荀卿ニ、既而焚ニ滅其書ニ、大變ニ古先聖王之法ニ、於ニ其師之道ニ不ニ啻若ニ冠簪ニ、及レ今觀ニ荀卿之書ニ、然後知下李斯之所ニ以事ニ秦者、皆出ニ於荀卿ニ、而不ニ足レ怪也、荀卿者、喜爲ニ異説ニ、而不ニ讓、敢爲ニ高論ニ、而不ニ顧者也、其言愚人之所ニ驚、小人之所ニ喜也、子思孟軻世之所謂賢人君子也、荀卿獨曰、亂ニ天下ニ者子思孟軻也、天下之人如レ此其衆也、仁人義士如レ此其多也、荀卿獨曰、人性惡也、桀紂性也、堯舜僞也、……荀卿明ニ王道ニ述ニ禮樂ニ、而李斯以ニ其學ニ亂ニ天下ニ、其高談異論有ニ以激レ之也。 (東坡文集 荀卿論)

(4) 其書(荀子)大旨在ニ勸學ニ、而其學主ニ於修禮ニ、徒以惡ニ人恃レ質而廢レ學、故激爲ニ性惡之説ニ、受ニ後儒之語厲ニ。 (四庫全書總目 子類儒家)

(5) 余謂性惡之説、非ニ荀子本意也、其言曰、直木不レ待ニ櫟括ニ而直者、其性直也、枸木必待ニ櫟括ニ亟矯、然後直者、以ニ其性不ニ直也、今人性惡必待ニ聖王之治、禮義之化、然後皆出ニ於治ニ合ニ於善ニ也、夫使ニ荀子而不ニ知ニ人性有ニ善惡ニ、則不レ知ニ木性有ニ枸直ニ矣、然而其言如レ斯、豈真不レ知ニ性邪、余因以悲下荀子、遇ニ世大亂ニ、民胥泯焚、感激而出レ此也。

(王先謙荀子集解自序)

(6) 夫學者病レ卿、以ニ李斯韓非ニ、卿老師、學者已衆、二子適見レ世、晝寢舖啜非ニ師之過ニ。 (臺州本荀子唐仲友後序)

(7) 宋人譏ニ荀卿ニ云、卿之學不レ醇故一傳ニ於李斯ニ而有ニ坑焚之禍ニ、此言過矣、孔子曰、與ニ其進ニ也、不レ與ニ其退ニ也、

弟子爲<sub>レ</sub>惡而罪及<sub>レ</sub>師、有<sub>ニ</sub>是理<sub>一</sub>乎、若李斯可<sub>ニ</sub>以累<sub>ニ</sub>荀子<sub>一</sub>、則吳起亦可<sub>ニ</sub>以累<sub>ニ</sub>曾子<sub>一</sub>矣。(丹鉛總錄卷二十六)

(8) 李斯問<sub>ニ</sub>孫卿子<sub>一</sub>曰、秦四世有<sub>ニ</sub>勝兵<sub>一</sub>、疆<sub>ニ</sub>海內<sub>一</sub>、威行<sub>ニ</sub>諸侯<sub>一</sub>、非<sub>ニ</sub>以<sub>ニ</sub>仁義<sub>一</sub>爲<sub>レ</sub>之也、以<sub>レ</sub>便從<sub>レ</sub>事而已、孫卿子曰、非<sub>ニ</sub>女所<sub>レ</sub>知也。……今女不<sub>レ</sub>求<sub>ニ</sub>於本<sub>一</sub>、而索<sub>ニ</sub>之於末<sub>一</sub>、此世之所<sub>ニ</sub>以亂<sub>一</sub>也。(莊子 議兵)

(9) 荀子非<sub>ニ</sub>十二子<sub>一</sub>、韓詩外傳四引<sub>レ</sub>之、止云<sub>ニ</sub>十子<sub>一</sub>而無<sub>ニ</sub>子思孟子<sub>一</sub>、愚謂、荀卿非<sub>ニ</sub>子思孟子<sub>一</sub>、蓋其門人如<sub>ニ</sub>韓非李斯<sub>一</sub>之流、託<sub>ニ</sub>其師說<sub>一</sub>以毀<sub>ニ</sub>聖賢<sub>一</sub>、當<sub>ニ</sub>以<sub>ニ</sub>韓詩<sub>一</sub>爲<sub>レ</sub>正。(王應麟 困學紀聞十)

(七)

第二段において然らば荀子は儒家の中どの系統の人であつたかといふことを調べて見たいと思ふ。荀子は非十二子篇の中に於いても其の他においても常に褒めて居るのは孔子と子弓である。或は以爲仲尼子游爲<sub>ニ</sub>茲厚<sub>一</sub>於後世(子游は子弓の間違)と云ひ或は下則法仲尼子弓之義。と云つていつも仲尼と子弓とだけを並べて居る。非相篇、儒效篇などにおいても同様に仲尼子弓を並べて居るのである。孔子は曰はずとも分つて居るが、さてその子弓といふ人は抑も如何なる人であらうか。いづれ荀子の先生若くは荀子の學統に關係のある人でなからかといふことは容易に推察せられるのであるが、さてその子弓といふものゝ人物が皆目分らぬ。秦漢諸子のどの書にも只子弓と書いた人は荀子以外にはないのである。そこで想像を以てすれば此の子弓といふ人物について凡三つの説が考へられる。

第一は、子弓は仲弓であらうといふのである。仲弓は勿論論語の中にある雍字は仲弓である。

第二は、子弓は仲尼弟子列傳中の肝臂子弓であらうといふのである。

第三は、子弓は子張子弓であらうといふのである。以上の三人が昔から荀子の子弓について考へられて居るのである。

第一の説は、荀子の原注を書いた楊倞の説である。此の説を信じようとする仲弓をば何故仲弓と言はずに子弓と言つたのかといふ第二の問題が起つて来る。之に就いて楊倞は説明して子といふのは、自分の先生を表はす言葉だ。先生に對する尊稱である、本當の字は仲弓といふ人であつたのであるが、自分の先生であるから子といふ字をつけた。

のであるとかういふ説明を施して居るのである、所が同じく子弓を仲弓なりとする學者に就いても後世の人はそれと別な説を立てゝ居る。清朝の兪樾（一）といふ人は新らしい説を立てゝ居る。此の兪曲園先生は、諸子平議を書いて居るがその中の荀子平議には此の部分の説明して云ふには、此の人は元來字が子弓といふ人であつただけれども五十以上になつて伯とか叔とかいふ所謂行排を加へる事によつて遂に仲弓と呼ばるゝに至つたといふのである。論語の中に子路といふ人がある。名は由字は子路であつたが五十歳以上になると行排を加へて季路と云つた。恰度其と同じ關係であると。かういふ説明をして居る。それでまあ仲弓と子弓との説明が出来る。仲弓とするかせぬかは別の問題として、仲弓とするならば楊倞の説よりか兪曲園の説の方が本當であると思ふ。兪樾のみならず汪中の述學（二）中に於ても兪樾と同じ説をして居る。汪中の方が先輩であるから汪中の説とした方が正しかつたであらう。

次は便宜上第三の朱張子弓説の方を先に説明する。此の説を立てたのは魏の王弼である。王弼のは論語釋文の中に引いて居るのであるが、さてその朱張といふ人に定めたところで、抑もその朱張といふ人がどういふ人であるかといふと、さつぱり分らぬ。それで之は殆ど問題になるまいと思ふから省く。第二の肝臂子弓といふ説を立てたのは、史記の注を書いた顔師古、それから風俗通を書いた應劭が初めであつて、それに唐の韓退之が賛成をし、宋の朱子も矢張それに賛成して居る。然らば此の肝臂子弓といふ人物は一體どういふ人物であるかといふと、史記に仲尼弟子列傳（三）といふのがある。其の中の一人で即ち孔子の門人として出て居る人物である。史記によると孔子は易を翟といふ人に授けた。その翟といふ人が宋人である所の今の肝臂子弓に易を授けたといふのである。以上の三説に就て此からそのどちらがいかといふ事について攻究してゆきたいと思ふ。前にも述べた遼<sup>遼</sup>秦漢の諸子書中に單に子弓といふ人物が有るか云ふのを調べたが一つもない。肝臂子弓といふ者も殆んど出て居らない。こんな次第で、此の三人の眞偽を定めることは實に分り難いのである。先づ初めに仲弓であるとして考へて見たいと思ふが、仲弓は勿論論語の雍字は仲弓であるから論語の中に大分度々出て居る。先づ公冶<sup>公冶</sup>長篇（四）に出て居るものに就て調べよう。或人がこの仲弓の事を批評して、あの男は仁はあるけれども佞ならずと批評した。佞といふのは、今日はすぐ悪い意味に用

ひるが、昔は口の達者といふ事で、必ずしも悪い意味ではなかつた。仲弓は情深い男であるが、どうも口才がないと言つたのである。所が孔子は焉ぞ佞を用ひんや、何も口才の必要はないと言つて仲弓の辨解をして居る。この言葉から考へて仲弓といふ人間は如何にも沈着で、口の才のある働のある人ではない。寧ろ徳行な人である。又論語の雍也篇(5)の中に、孔子が仲弓を批評した言葉が出て居る。其の一つは、雍也南面せしむべし。あの仲弓といふ男は南面の人君の位につける男である。ごく沈着な品の高い人間だと言つたのである。も一つ雍也篇の中に出て居るのは、孔子が仲弓の事を批評して、犂牛の子でも駢くして且つ角があつたならば、たとへ親が悪くとも、神はその子供を舍てる事はしないだらうと言つて居るのである。仲弓の父親は餘りいゝ人でないから、仲弓が始終心配して居つたのを、孔子が慰めて言はれたのである。その點から考へて我々は仲弓は矢張徳行家であつたといふ事を感じざるを得ぬ。論語の先進篇(6)の所に所謂孔門の十哲といふものを擧げて居る。我に陳蔡に従ふ者は云々といふ後に孔門の教義を四つに分けて徳行、言語、政事、文學として居るが、徳行の所に於て顔淵閔子騫、冉伯牛と相配して此の仲弓を徳行家の部に入れて居る。かう考へて見ると論語のどの點から考へても仲弓といふ人はすべて徳行家であつた。此の外仲弓の事は尙顔淵篇と子路篇とに出て居るが、顔淵篇に於ては仲弓が仁を問ふた時孔子が、出レ門如レ見大賓、使レ民如レ承大祭、と教へたのに對し仲弓は、雍雖不敏、清事斯語矣、と言ひ、子路篇に於ては仲弓が季氏の宰となつて政を問ふた話が出て居るが、之は餘り關係がない。免に角どの點から見ても學者肌の人といふよりは寧ろ徳行家肌の人であるといふことが認められるのである。現にまた史記の仲尼弟子列傳の中にも矢張此の仲弓を批評して、仲尼以仲弓爲有徳行、と云つて居る。此は一つ注意すべき點であつて荀子の學統に仲弓が關係があるかないかといふ事を定める重要な資料となると思ふ。大體孔門の學統と云ものは大きく分けて二つになつた。一つは徳行を以つて立つ曾子の流れ、も一つは學問を以て立つ子夏の流れである。この徳行の系統を繼いだ者が孟子であり、子夏の學問の系統を繼いで來るのが今の荀子の系統になる。そしてこれが後になつて來ると徳行の系統のものが宋の時分の道統論となつて表れ、學問の系統のものが所謂漢代の師法家法となつて表れる。そして之が更にすつと系統を引き、一方が清朝の宋學派と

なり、一方が清朝に於ける漢學派となつて相争ふことになるのである。此の大勢から見ると仲弓といふ人はどう考へても德行科の人である。即ち孟子の方の系統の人であつて荀子の方の系統の人ではない。隨て學問の系統から申すと荀卿が仲弓を師として居つたといふ事は考へられない事である。それに反して、肝臂子弓の方であると、學統上大變都合が宜しくなる。第一肝臂子弓は、仲尼弟子列傳によれば、易を傳へた人である。即ち經を傳へるといふ仕事をして居る。それからもう一つ肝臂子弓は子夏の門人である。即ち始めは孔子の門人でもあつたがごく末期の門人であつた爲めに後には子夏の門人にもなつたのである。而して其の子夏といふ人は今述べた通り孔子の學統に於ては經說を傳ふる方に最も力のあつた人である。今少し傍徑に入るが暫く子夏の傳徑に就いて二三話して見たいと思ふ。先づ例によつて一番正しい論語の方から考へて見る。論語によると子夏といふ人が德行の人であるといふよりは全く學者肌の人であるといふことが明瞭に分つて來る。先づ學問的であつたといふ證據には、子張篇の中に日知其所亡、月無忘其所不能、可謂好學也已矣。といふのが子夏の言葉として出て居る。又子夏の言葉として博學而篤志。切問而近思仁在其中矣。といふのも出て居る。更に子張篇に仕而優則學、學而優則仕といふのも出て居る。此等は何れも子夏の人物の學問的であつたことを證明するものである。それから又子夏が經學に特に關係があるといふ事は先進篇の中に先程の十哲の數へ方の中に文學には子游子夏と言つて居るによつても分る。此の時分の文學といふのは、今日の文學といふのの意味が違ふので、文といのは則ち古の遺文。古の遺文と申せばいふ迄もなく六經である。即ち子夏は其の經學の方の達人であつたといふのである。それから又雍也篇の中では孔子は子夏を戒めて、女爲君子儒、無爲小人儒、といつて居る。孔子が儒といふ字を用ひたのは之が初めてであるが、斯く子夏に就いて單なる物識りだけの人間になつて了つてはいかんど、書物ばかり讀んで居る人間になつてはいかんどといふ戒める點から考へて子夏といふ人物が徳行家たるよりは寧ろ學者肌の人であつたといふことが畧分るのである。それからもう一つ、八脩篇に、孔子が子夏を褒めて、商也始可與言詩已矣。この人こそ始めて詩經を語るに足りると言つて居る。さういふ點から考へて子夏といふ人物が大體此の孔子の門人中最も經學に關係の深いといふ事を思はしむる。それで後代になると段々この子夏

と經學、傳經の關係を調べた人が多いのであるが、宋の時分になつて、洪邁はて容齋隨筆、7)の中に子夏の經學といふ一つの文章を出して居る。一篇の文章を讀むと殆んどどの經學も皆子夏と關係がある事になつて居る。易については子夏が傳を作つて居る。詩經については序を作つて居る。禮については儀禮の喪服傳を作つて居る。かういふ様に議論を進めて居る。最も之を一々について論ずると、少しく問題が出て來ることは勿論である。第一今日の子夏易傳といふ本は漢書の藝文志には出て居らず、その後のものに出て來たものであるから之は勿論後人の僞作である。それから詩經の序、之が矢張子夏の作であるといふけれども、之も詳しく議論をすると、矢張問題になつて居る。唐になつてから韓退之が詩序之議といふ一篇を作つて駁して居るが、それは當然の議論である。禮については子夏に關係のある事は禮記の檀弓を初めとしてその中に子夏の言葉が非常に多いのである。殊に儀禮の喪服傳は子夏の作だと昔から傳へられて居る。併し乍ら研究をすると今日の喪服傳といふものは子夏のものでない事が畧決定がつくのである。それから春秋の方はどうかといふと、唐の陸德明の經典釋文では、春秋の公羊傳、穀梁傳と子夏との關係について師弟の關係があるといふ事を論じて居る。之は或點まで信じる事が出来るものである。かういふ様に考へるとどの經書も皆若干は子夏と關係を持つのである。勿論中には若干の怪しい點はあるが、併し後代の僞作にしても其の僞作の名を子夏に託する根底に於ては矢張子夏が一番經學と關係のあつたことを髣髴せざるを得ぬのである。以上孔子の門人中一番傳經の關係の多いのが子夏であるといふことが決定せられる。此の子夏と荀子との間に關係がつけば大變面白いのであるが、幸にも其が肝臂子弓を介すれば關係がつき得るのである。前述の如くに肝臂子弓は子夏の門人になつて居るから若し肝臂子弓の門人として荀子が出て來ると言ふと此の系統が一直線について來るのである。但こゝに一つの問題は此の立論は十二子篇を本にするのであるが、その非十二子篇の中に、荀子が子夏の惡口を書いて居る點の存することである。即ち子夏を批評して、正其衣冠、齊其顔色、嗛然而終日不言、是子夏氏之賤儒也、と云つて居るのを何と見る可きかといふ問題になる。此に就いて清朝の江瑛といふ人は讀子廬言(8)といふ本を書いてかういふ風に辨解して居る。曰くすべて昔の人で何々氏と書いてあるのは直接其人を指すのではない、その學派を受けた所の未流を指す

のである。だから非十二子篇中に今述べた衣冠を正しくし、顔色を齊へ云々といふのは子夏氏即ち子夏の末流の悪口であつて決して子夏其人の悪口ではないといふ。併し此の江璩の説は果してどうであるか少し牽強に過ぐるかと思ふ。私は若し荀子が子夏の悪口を言つたとしても其は大した問題としなくてもいゝかと思つて居る。若し荀子といふ人が經學を傳へたといふ傳經上の研究が確定せば、荀子が肝臂の門人たるを斷する上に於て差支なく、且最も都合がいゝと思ふから此から其點を少し論じて見たいと思ふ。

(1) 樾謹按、楊注、曰子弓蓋仲弓也、此說是也；又曰、子者者其爲師也、則恐不然、仲弓稱子弓、猶季路稱子路耳、子路也子弓也 其字也、曰季曰仲、至五十二而加以伯仲也。(荀子平議、一)

(2) 子弓之爲仲弓猶子路之爲季路。(汪中述學 荀卿子通論)

(3) 孔子傳易於瞿、瞿傳楚人肝臂子弓。(史記 弟子列傳)

(4) 或曰、雍也仁而不佞、子曰、焉用佞、禦人以口給、屢憎於人、不知其仁、焉用佞。(論語 公冶長)

(5) 子曰、雍也可使南面。(論語 雍也)

子謂仲弓曰、犁牛之子、騂且角、雖欲勿用、山川其舍諸。(論語 雍也)

(6) 子曰、從我於陳蔡者、皆不及門也、德行顏淵、閔子騫冉伯牛、仲弓。(論語 先進)

(7) 孔子弟子、惟子夏於諸經、獨有書、雖傳記雜言、亦可盡信、然要爲與他人不同矣、於易則有傳、於詩則有序、而毛詩之學、一云、子夏授高行子、四傳而至小毛公、一云子夏傳曾申、五傳而至大毛公、於禮則有儀禮喪服一篇、馬融王肅諸儒多爲之訓說、於春秋所云、不能贊一辭、蓋亦當從事於斯矣、公羊高實受之於子

夏、穀梁赤者、風俗通亦云、子夏門人、於論語則鄭康成以爲仲弓子夏等所撰定也、後漢書徐防上疏曰、詩書禮樂定自孔子、發明章句、始於子夏、斯其證云、記雜言未可盡信、然要爲與他人不同矣。(容齋續筆 子夏經學)

(8) 荀子所非者、子張氏、子夏氏、子游氏耳、非子張子游子夏也、所謂子者、指其一人之身、所謂氏者指其一家之學、未可混而一之也、古者姓之外有氏、婦人稱姓、男子、稱氏、氏者所以別子孫之所出也。(江璩 讀



先づ第一に荀子といふ人は六經、就中詩書について最も多く理解を持つた人であるといふことを申さうと思ふ。それは荀子の至る所に出て居るので、例へば、勸學篇、或は榮辱篇などを初めとし、詩經書經を引いて議論の骨子にして居る所が非常に多い、先きに申せし汪中の述學の中には、荀卿子通論といふものを書いて居るが、其中の一節にかういふ文句を書いて居る。六藝之傳、六藝は即ち六經で有る、六藝之傳因て以て絶えざるものは荀卿也、荀卿の力によつて保存されたとかういつて居るのである。之を一々の經書について少しく系統を尋ねてみよう。

先づ詩經中の毛詩と荀子との關係をとつて見る。經典釋文の序録の説によれば、子夏——曾中——李克——孟仲子——根牟子——孫卿子(荀子)といふ系統になつて居るので、其の荀子が毛公に傳へたことになつて居る。即ち毛詩といふものは完全に子夏荀子によつて關係づけられたといふ事が分る。又魯詩はどういふ關係になるかと云へば漢書の楚の元王傳によると孫卿——浮邱伯——穆生——申公といふ系統になつて居る。此の申公が則ち申培といつた人で、魯詩の元祖である。魯詩も矢張荀子から出て居るのであつて、韓詩はどうかと申せば之は今日は僅かにしか残つて居らないから明瞭な事は言へぬが、外傳の中に荀子の説を引いて詩を解釋して居るものが約四十四もあるから荀子の學問と韓詩との關係は明瞭に考へ得るのである。漢書の儒林傳は荀子——○——韓嬰といふ系統を立て、居る。此の韓嬰は勿論韓詩の傳祖である。此で先づ詩經の方では齊詩以外兎に角も他の三家はいづれも此の荀子と關係がある。

それから春秋は荀子とどう關係するかを調べよう。左傳は作者を左丘明とすることそれ自身が甚だ疑はしいのであるが、普通の説によつて左丘明とし、左丘明——曾申——吳起——吳期——鐸椒——虞卿——荀子——張蒼といふ系統になつて荀子との關係も明瞭になる。之は經典序録の説である。次に穀梁傳はどう關係するかと云へば正義の中に出て居る楊子助の説では穀梁赤——荀子として荀子を穀梁赤の直傳として居る。春秋三傳の中のが三つに分れて、公

羊、穀梁、左傳となつて居るが、その中の二つとも荀子と關係がある集事になつて居る。

それから次は、禮はどうなつて居るか、之は荀子の教といふものが殆ど禮であるといふ事は誰も認めて居る、第一荀子には禮論といふ特別の編が出て居る、それによつて略分る譯であつて、今日残つて居る大戴禮、或は小戴禮、則ち禮記、これらの中にある事は荀子の論に一致する點が非常に多い。今その顯著なものについて話せば、大戴禮の中に禮三本といふ篇がある。その同じ議論は荀子の禮論の中に出て居る、小戴禮の三年問の篇といふのがある。それと同じ議論が、矢張荀子の禮論の中に出て居る、又禮記の哀公問の中にあるのと同じ議論が荀子の觀學編の中に出て居る。卿飲酒禮、それと同じ議論が荀子の方の或篇に出て居る。かういふ關係で荀子と禮との關係は幾らも考へられるのである。さういふ様に考へて來ると、荀子は傳經上最も功績の多かつた所の儒家であるといふ事が言へる、その傳經の關係を以てゆくと、孔門の中に於ては子夏の系統の學者であると考へられる。若しさうとすると、荀子の度々口にした仲尼、子弓の子弓は矢張孔子の門人後には子夏の門人である肝臂子弓であるといふ事にした方が一番學統上の系統が整ふではあるまいかと考へるのである。但し實際の具體的事實は必ずしも論理の系統とは一致するものとは決つて居らないから、勿論必ず肝臂子弓であると論定する譯には行かない。只肝臂子弓とした方が學統上からは都合がよろしいと申す丈の事である。

最後に非十二子篇を讀んで我々が考へられる簡單な事を一つ附加しておきたいと思ふ。其は先秦時代の諸子の分類といふ事である。非十二子は人は十二人であるが、系統は六通りとなつて出て居る。它畧魏牟これが一つ。陳仲史鱣之が一つ。墨翟宋鉞之が一つ。慎到田駢之が一つ。惠施鄧析之が一つ。子思孟軻之が一つ。斯うなる。莊子天下編の中にも矢張かういふ風に諸子を論じた所があるが、それには鄒魯之士を一つに論じて、墨翟禽滑釐を一つに論じ、苦獲。已齒。鄧陵子と宋鉞。尹文子とを一つに論じ、彭蒙、田駢、慎到とを一つに論じ、關尹喜、老聃を一つに論じ、惠施公孫龍を一つに論じて居る。又荀子の後になつても淮南子の要略篇は矢張諸子を論じて居つて、其は儒者之學、節財薄葬閑服、管子之書、晏子之諫、縱橫脩理、刑名之書、商鞅之法といふ様に分類して論じて居る。先秦諸子といふも

のを稍分類したのは以上の三つが一番最初である。莊子の分類中若し一々名前をつけて見るならば、鄒魯之士は勿論儒家であり、墨翟禽滑釐は墨家であり、苦獲鄧陵子などをば莊子は別墨といふ名前で見はして居る。それから次の彭蒙、田駢、慎到は法家。闕尹老聃は言ふ迄もなく道家で、惠施公孫龍は名家である。だから荀子の分類它糞魏牟が道家、陳仲史鱮が雜家、墨翟宋鈞は墨家、慎到田駢が法家、惠施鄧析が名家、そして子思孟軻が儒家といふのと大差はない。今日我々は諸子といふ事を普通に言つて居るが、實はこの諸子といふ名前は餘餘（後代）に起つたのであつて、先づ漢の劉歆の七略——この本は亡びて了つたが、七略に至つて初めて諸子といふ名前が出たのである。即ち劉歆は當時宮中にあつた書物を整理して輯略、六藝略、諸子略、詩賦略、兵書略、術數略、方伎略の七略に分けたのであつて、この諸子略の中に儒家、道家、陰陽家、名家、墨家、雜家、農家、小説家を數へた。此の劉歆の七略を始（もと）とそつくり承けたのが漢書の藝文志であり、その藝文志の後を繼いだ隨書の經籍志が始めて典籍を經子史集の四部に分ち、更に清朝の四庫提要の分類の先を爲したのである。要するに荀子は莊子と共に此の諸子分類の最初をなしたといふ點から言つても餘程偉い人であるといふ事が肯定せられるのである。以上は非十二子篇を讀んで吾々の感じたことを雜然と書き並べたのである。凡て一篇の文でも之を味ひ、之を咀嚼すれば可なり多くの問題が其の中から演繹せられるといふことを若干なり示し得れば此の小論文の目的は足りるのである。